

## 国のために死ぬるか

自衛隊「特殊部隊」創設者の思想と行動 伊藤祐靖

1999年、能登沖不審船事件で、初めて海上警備行動が発令され、自衛隊員が不審船の立入検査に臨むことになった。追いかけて、追いかけて、威嚇射撃を繰り返し、そのうち、エンジンの故障か、不審船が止まった。「止まってしまった！」……誰か日本人を拉致しているかもしれない。立入検査が必要になる。相手は高度な訓練を受けた北朝鮮の作業員たちだ。銃撃戦と自爆装置でごく普通に考えて立入検査隊は「全滅」する。

そして、いったん解散した検査隊員たちが、浴室に帰ってきて再集合した。驚いたことに、彼らの表情は一変していた。

胴体には、防弾チョッキのつもりか、少年マガジンが、ガムテープでぐるぐる巻きにしてあった。そんな滑稽な姿なのに、私は彼らに見とれた。10分前とは、まったく別人になっていたからだ。

悲壮感の欠片もなく、ニコニコはしていないが、清々しく、自信に満ちて、どこか余裕を感じさせる、美しいとしか言いようのない表情だった。

若い立入検査隊員たちはじつに清々しい表情で、準備を終えた。特攻隊で飛び立って行った先輩たちもきっとこの表情で行ったに違いない。

防弾チョッキもない。私の部下が、「航海長、お世話になりました。行って参ります。」

30分後にはこの世にいなくなる彼に、何かを言わなければと思ったが、私は何も言えなかった。挙手で答礼するのが精一杯だった。彼は言い終えると、吹っ切れたように再び正面を向いて進み始めた。そして5,6歩行ったところで急に振り向いた。「航海長、あとはよろしく願いいたします」

その重すぎる一言に、私は大きく頷くことしかできなかった。そして、2つのことを考えていた。

ひとつは、彼らを、政治家なんぞの命令で行かせたくない、と思った。彼らの表情はなぜ美しかったのか。それは、彼らが“わたくし”というものを捨て切っていたからだ。若い立入検査隊員たちは、短い時間のうちに出撃を覚悟し、多くの欲求を諦めていった。そして、最後の最後に残った彼らの願いは、公への奉仕だった。

それは、育った環境や教育によるものではなく、ごく自然に、自らを滅すことの意義として生じた願いである。私はそう感じた。

そしてもうひとつ、「これは間違った命令だ」とも考えていた。美しい表情

の彼らに見とれながら、「彼らは向いていない」と思った。向いている者は他にいる。

立入隊員の彼らは、自分の死を受け入れるだけで精一杯だった。任務をどうやって達成するかまで考えていない。しかし、世の中には、「まあ、死ぬのはしょうがないとして、いかに任務を達成するかを考えよう」という者がいる。この任務は、そういう特別な人生観の持ち主を選抜し、特別な武器を持たせ、特別な訓練をさせて実施すべきであって、向いていない彼らを行かせるのは間違っている。

わずか 70 年前には、本当は向いていなくとも、決して戻ってくるのではない出撃をしていく光景は、日常的に繰り返されたのかもしれない。そうして“わたくし”を捨てた人間の表情も美しかっただろうが、それを美談として語り継ぐだけでは、先輩の死は浮かばれない。

この方のお父上は、陸軍中野学校出身で、と語る。少し、世間の人間と感性が異なっていたようだ。あるとき、何かをしようとしたときに、やったら死刑になるかもしれない、と言ったら、「死刑になるからやらないのか。なぜやらない」とか「戦争は、どうしても譲れないものがあるからする」

父にとって、1945 年 8 月 15 日とは、武によって国家理念を貫くことを諦めた日に過ぎない。父が今もって解放されないのは、当時の日本人が信じた国家理念が、ろくな総括もないまま、いつの間にか全否定されるようになってからである。

日本は現在、国として何を理想としているかをはっきりさせていない。国際協調も大切に、国連もいだろう、しかし、国連憲章に従って国の進路を決めるわけではない。独立国として目指すべき理想は、過去に縛られてばかりではいけないし、戦争に負けたことを前提とする必要もない。ましてや、断じて、決して他国に委ねるものでもない。

### 拉致被害者の救出

よく、自衛隊を投入すれば、北朝鮮に拉致されたままの日本人を奪還できるか、と問われることがある。

できるのか、できないのか、ということであれば、できる。

拉致に関する情報が少なすぎて判断しようがないだろうと首を傾げる人もいるが、その人のところにはなくても、あるべきところには、信じられないくらいあるし、仮に情報がなかったとしても奪還の方法は幾らでもある。

また、なによりも、拉致の問題は、奪還できそうだからするとか、難しそ

うだからやめておくとかといった次元の話ではない。

では、その奪還は難しいのか、難しくないのか。そう問われたならば、こう答える。

一般部隊を投入して完遂できる作戦ではない。が、海上自衛隊の特別警備隊、陸上自衛隊の特殊作戦群の2つを投入すれば、大して難しい作戦ではない。

ただし、奪還作戦を敢行すれば、犠牲者はでる。奪還する日本人の5倍から15倍の犠牲を覚悟しての作戦立案になる。作戦の難易度と、犠牲者が出るか否かは、別の話だ。犠牲者がでても完遂できるのであれば、それは難しい作戦だと考えない。軍事作戦とは、そういうものである。

その作戦に向かう者は、無論、拉致被害者を奪還するために飛び立つが、しかし、それがすべてではない。自分の国がいかなる犠牲を払ってでも実行しなければならないと信じたこと、許してはいけなさと決めたこと、それを貫こうとする国家の意志に自分の生命を捧げるため、飛び立つのである。

どんなに美しい言葉で飾ったところで、軍事作戦とは、国家がその権力を発動し、国民たる自衛官に殺害を命じ、同時に殺害されることを許容させる行為なのである。

ゆえに、権力発動の理由が、「他国とのおつきあい」などというものであってはならない。たとえ同盟関係があろうとも、軍事作戦発動の根底にある目的は、日本の国家理念に基づくものでなければならない。

だから、国家理念以外の理由では、軍事作戦を発動できないようにするための規則ならば大いに作るべきだし、逆に、発動しなければならない理由があるにもかかわらず、それを阻むような憲法や法律が存在するのであれば、その存在自体が間違っている。

なぜなら、憲法や法律を制定する目的もまた、国民の目指す理想像や国家理念の実現のためにあるからだ。

国家理念は、和をもって実現することが理想だが、論をもって説かなければならない場合もあるだろう。忍をもって耐えなければならない場合もあるだろう。

同様に、武をもって国家理念を貫かねばならない場合もあるはずである。それが最悪にして最終の手段であることは間違いないが、武を使うことを避けるために国家理念を放棄することだけは、断じてあってはならない。

これが武を発動するための根本原理であり、軍隊（自衛隊）の存在理由である。

拉致問題に関して言えば、論も十分に尽くしたし、忍も充分すぎるほどした。

しかし、問題はいまだ解決しておらず、いたずらに耐え忍ぶことを、拉致被害者とその家族に強要し続けているのが現状だ。自国の領土内から自国民が連れ去られ、誰の手によって、どこに監禁されているのかも知っていながら、日本という国は、最終手段として残されているはずの武を使うことを避けるために、状況を放置している。

もし、それが日本の理念だというのであれば、もはや国家ではあるまい。このことは、右だ左だというイデオロギーの問題ではなく、すべての国民にとって最低の認識であると思う。

国家が国家として体をなすためには、最悪にして最終の手段である武の発動に備え、心を整え、技を磨き、身体を錬磨し、軍事作戦発動の際には、それらすべてを惜しげもなく捧げられる者が必要なのである。私はそのためにこの国に生まれてきた。

櫻井よし子さんが、この本を読んでいて涙がとまらなかったというが、特にこのあたりのことだろうと思う。ボクも、胸が震えるほどの感動をおぼえたもの。我々は、この人の覚悟の欠片さえもっていないだろうと思われてならなかった。忸怩たる思いをしている。国会議員（与党野党を問わず）にも読ませたい。そして命懸けで国政に携わってほしい。些細な揚げ足取りに終始せず、本気で国家・国民のことを考えてもらいたい。彼の足元にも及ばない、私利私欲の塊は、もう要らない。必要ならば憲法改正も充分視野に入ってくる。現憲法を至上のものとするのは勝手だが、日本が貶められるのであれば、それなりの措置が必要になる。イデオロギーを弄んでいる暇はないのである。拉致被害者の家族の年齢も考えねばならない。

伊藤氏は、42歳で、特殊部隊がほぼ完成しつつあったときに退官し、ミンダナオ島に3年ほど行った。そこで、20歳くらいの女の子をトレーニング・パートナーとして選んだが、むしろ教わることの方が多かったという。ミンダナオ島は、フィリピン第2の島で、ルソン島と違い、イスラム教が残っている。独立を狙っているという。その一部始終は、この本（文春新書 2016）を読んだ方が理解しやすいから、ここでは述べない。ただ、トレーニング中、命を落としかけたことはいくらでもでてくる。銃の照準ひとつ、漠然と考え

ていたことや、これを他国の民間人に教わったり、たとえば関節技が決まった時にタップしてギブ・アップすれば許してもらえようような生易しい考え方はない。毎日の訓練が、即生命に直結するのである。柔道でもレスリングでも、あるいはさまざまな格闘技であっても、ルールがあって、その範囲内で戦うのであるが、彼らの日常には、そんなルールに則って練習する、というようない生易しさなど、欠片もない。それこそ命懸けで訓練するのである。

「あなたの国はおかしい！」

このトレーニング・パートナーが、ある日こう告げた。誰かに日本国憲法がGHQによって作られ、しかも、一字一句変更していないことを教えてもらったのだろう、心の底から怒っていた。・・・そしてこの女性の主張することに対し、明確に答えることができず、いまだに解決できていないとも言う。

「あなたの国はおかしい」「私の処は過去に3回、近くの部族に占領された。占領されそうな時は、老若男女を問わず、命を賭けて戦う。もし占領されたら、それまでの風習・習慣を陰で伝承して、占領している奴の首を狙う。必ず絶対に、何があっても、いつか切り落とすわ。自分の代でできなければ、子供の代、子供ができなければ、孫の代、それもだめなら、その次、その次。・・・永遠に狙い続け、絶対にあきらめない。」

「掟（日本でいう憲法）というのは、若い人が作るものじゃないわ。通りすがりの旅人がつくるものでもない。ましてや、向かいの島の奴がつくるなんてあり得ないのよ。この土地に本気で生きた祖先が残してくれるもの。それも長老が自分の生涯を閉じる直前に修正をして次の長老に渡して、試行と修正を数限りなく繰り返してきたものよ。だから、この土地に生きる者にとってどんなものより大切なものなの。もうつukれないからね。そこには、我々が許してはいけないこと、許さなければいけないことのすべてがあるのよ。」・・・「あなたの国の掟は、誰がつくったの？」

「あなたの国に本気で生きる気のある人がつくったものでなければ、その土地に合うわけがないのよ。あなたの国に元々あった掟はどうしたの？」・・・

太平洋の向こうの奴がつくったものより駄目なものだったの？そんなものしか、あなたの祖先は残してくれなかったの？」

いや、そんなわけではないが、と抗うが、圧倒的に彼女の言うことの方が筋が通っている。

「なんで、アメリカの掟がそんなに大事なの？何があるの？どんないいこ

とがあるの？」

「その掟を大事にすればアメリカが何かしてくれるの？あなたの国に原爆を2度も落とした奴にして貰いたいことって、いったい何なの？」

「あなた、守って貰いたいのか？アメリカは守ってくれるのか？」

.....

「あなたは、日本を守るためにここに住むって言ったわね。みんな信じてるわよ。だから、あなたはここで生きていられるのよ。そのあなたも、他人が作った掟を守ろうとしてるの？.....12時間以内に、あなたは生き物じゃなくなるわよ。」.....殺害予告だった。脅しでもなんでもない。本気で私の命をとりに来るだろうと思った。

祖先の遺してくれた掟を捨てて、他人が作った掟を大切にするような人を、あなたは、なぜ助けたい？そんな人たちが住んでいる国の何がいいの？」

ミンダナオの20歳そこそこの女の子の言っていることの方が、自称憲法学者と偉そうにしている東大などの学バカより、はるかに正鵠を射ている。

現在の憲法を不滅の大典と崇め奉っているノ一天気な平和ボケした連中のことを考えるとき、彼女の怒りが胸にこたえる。現憲法などドブに捨てる！

数日後、伊藤さんは、どの特殊部隊員よりも優れた技術をもって、帰国する。伊藤さんの意見が続く。

私は現在の日本に不満があるし、不甲斐なさも感じている。しかし、「あなたは、日本に危機が訪れたらこの国を守りますか？」と聞かれれば、「守ります」と即答するし、なぜ守りたいのかを聞かれれば「生まれた国だからです」「群れを守りたくなる本能が植えつけられているようなのです」と答えるだろう。

ただしだ。

せつかく、一度しかない人生を捨ててまで守るのなら、守る対象にその価値があってほしいし、自分の納得のいく理念を追求する国家であってほしい。

それは、肌の色や宗教と言わず、人と言わず、命あるものと言わず、森羅万象すべてのものとの共存を目指し、自然の摂理を重んじる国家であってほしい。